

# 肥前島原松平文庫蔵『石山世尊院千句』の翻刻と解説

松 本 麻 子

## 【解説】

『石山世尊院千句』（『石山千句』）は、永祿七年（一五六四）五月一二日に興行された千句連歌である。近江国石山寺世尊院で景恵により帳行された。第一百韻の発句を近衛種家（梅）に請い、紹巴・心前・仍景（後の昌叱）らの連歌師と、石山寺の僧侶たちで巻かれたもの。宗養没後まもなく成った千句で、連歌界の第一人者となった紹巴の意欲が現れた作品と位置づけられる。全文の翻刻は『続群書類従一七上』に所収されているが、本稿の底本である「肥前島原松平文庫」本と比較し多くの異同が見られることから、ここに全文を翻刻した。

なお、翻刻に際し、仮名遣いと踊り字は底本のママに、旧字は新字に改めた。

## 【書誌】

『石山世尊院千句』。肥前島原松平文庫。番号、二〇一一九。写本一冊。外題に「石山世尊院千句」。内題ナシ。表紙は、藍色無地。本文楮紙。寸法、縦一五・二糎×横二二・〇糎。本文、墨付四一丁、一面一四行書、一句一行。遊紙、前後ともにナシ。奥書に「永祿七甲子年五月十二日

於石山世尊院」。

## 【翻刻】

永祿七年五月十二日

何路 第一

- 1 常磐木も色そふ山の若葉哉 梅
- 2 しはし晴たる五月雨の雲 景恵
- 3 月かけも簾の露につたひきて 紹巴
- 4 啼よる虫の宿ちかき暮 清誉
- 5 うらかれに野や成そめて浅からん 你阿上人
- 6 行水見えぬ沢のたな橋 元理
- 7 末遠き小川の流ほのかにて 守仙
- 8 日はさしなから時雨すらしも 仍景
- 9 吹をくる雲の方わく山風に 玄哉

- |    |                 |    |    |                   |    |
|----|-----------------|----|----|-------------------|----|
| 10 | ねくらさためぬ鳥のこゑく    | 心前 | 34 | うへはみさほをつくるくるしき    | 恵  |
| 11 | 人帰る竹の下道暮やらて     | 能哲 | 35 | ことよきやあたる筋にまじるらん   | 巴  |
| 12 | 田面につく野への一むら     | 源心 | 36 | 露の玉まく葛の葉かつら       | 阿上 |
| 13 | 遙かにも堤の水やけふるらん   | 珠長 | 37 | 明ゆけは籬の山に雨過ぎて      | 阿上 |
| 14 | かすみのにこる日は長閑也    | 頼喜 | 38 | 別かねたる月のよこ雲        | 譽  |
| 15 | 散ちらす山のはしろき花の雪   | 滋成 | 39 | みし夢の名残身にしむ草枕      | 哉  |
| 16 | 松にとたえし春風の音      | 道九 | 40 | 野らと成ての秋のかなしき      | 理  |
| 17 | かきならす琴のしらへも宵更て  | 文阿 | 41 | 待となく虫の音をのみともなひて   | 阿上 |
| 18 | 端居の月にたれすむらん     | 音阿 | 42 | たのめぬ暮をたちうかれぬる     | 景  |
| 19 | ゆふたちは見るく過る空なれや  | 澄賢 | 43 | 忘れんと思ふたにうき佛に      | 哲  |
| 20 | みとりそひ行草の末々      | 巴  | 44 | 花は嵐の雲はらふみね        | 巴  |
| 21 | 関とめし河への水やあまるらん  | 恵  | 45 | さえのこる山や春をもわかさらん   | 長  |
| 22 | 瀬々にわかる滝浪のこゑ     | 阿上 | 46 | 消ま降そふ雪の下庵         | 前  |
| 23 | 立ならふかけは岩ほのいやたかみ | 譽  | 47 | 明そむる窓の灯かすかにて      | 恵  |
| 24 | たえすおこなふ法の古寺     | 仙  | 48 | むかしのことはつきぬかたらひ    | 成  |
| 25 | 出んその暁をまつ仏にて     | 理  | 49 | あはてしもつもの恨のいか計     | 巴  |
| 26 | うちぬる程は夕やみの月     | 哉  | 50 | 人つてのみの中そはかなき      | 譽  |
| 27 | あつさはた残りもあへぬ秋風に  | 景  | 51 | 雲かゝる山時鳥待々て        | 哲  |
| 28 | 行々深き山本の露        | 哲  | 52 | たちこそぬるれ袖の村雨       | 阿上 |
| 29 | 末は猶木葉こみたる道分て    | 前  | 53 | やとりかるあるしの心とりかたみ   | 理  |
| 30 | 身のかくれ家も人やとはまし   | 長  | 54 | 酌盞はあまた度まで         | 巴  |
| 31 | なくは世につらきも思出つへし  | 喜  | 55 | けふの賀をはしめなるへきことふきに | 成  |
| 32 | ちきりもをかてよしやわかれん  | 成  | 56 | わかかなやいつの世をためしとか   | 哉  |
| 33 | 今さらの袖のなみたのひまもやは | 九  | 57 | 春日野や霞にこもる松高み      | 喜  |

58 うらなる日にあそふ蝶鳥  
 59 道のへは春の朝露置乱れ  
 60 所々の草むらの霜  
 61 木からしのはつかなりける色朽て  
 62 むせふ石間もたえぬ山水  
 63 月清み結び馴たる暁に  
 64 覚てもおなし秋の夜の夢  
 65 千声より後猶やまてうつ礎  
 66 哀もよほす賤かいとなみ  
 67 わふるとちことをかはせるちか隣  
 68 のかれぬ道を嘆くかしこさ  
 69 暮かたの春には花も守捨て  
 70 いつくか帰る園のうくひす  
 71 八重霞かすみ閉たる谷の戸に  
 72 なかる、水は氷とくらし  
 73 袖にさへ今はせかれぬ泪にて  
 74 あふうれしさそやる方もなき  
 75 またれしは秋のこよひの空の月  
 76 初かりかねを萩かえの露  
 77 立こむる霧も垣ほの山晴て  
 78 末は田中の水の水上  
 79 ふみならず岩の雫やつもるらん  
 80 うちつれてしも行馬さくり  
 81 またしらぬ人の情を旅に見て

九 理 前 景 巴 前 恵 誉 喜 応 哲 阿上 理 哉 仙 巴 誉 長 巴 景 前 理 九  
 哲 哉 理 成 景 巴 前 恵 誉 喜 応 哲 阿上 理 哉 仙 巴 誉 長 巴 景 前 理 九

82 雪をわする、夜はのうつみ火  
 83 梅か、もちかき扉やひらくらん  
 84 袂にかよふ風の青柳  
 85 閑なる春の磯きは舟さして  
 86 うきてかもめのねふる夕波  
 87 日のうつる山をむかひの水遠み  
 88 限ありけるなか雨の空  
 89 つれくをしはしをくれる物いみに  
 90 とふはまれなる神かきの内  
 91 秋といへは月に心のさそはれて  
 92 千くさか露を分いつる袖  
 93 霧ふかき野中の暮のわたし舟  
 94 をくる、道そいやましに成  
 95 老はた、いにしへのみのしたはれて  
 96 植て見し世の花そうつろふ  
 97 やとりをも春はかはらすとひけらし  
 98 軒につはめのたちならひぬる  
 99 芦ふける田つらのいほりかたふきて  
 100 かさなるうへの霜の朝風

阿上 巴 景 恵 前 理 誉 阿上 巴 景 恵 前 理 九  
 梅 一句 能哲七  
 景恵七 源応四  
 紹巴十二 珠長五  
 清誉八 頼喜五

你阿上人九 滋成六

元理八 道九三

守仙三 文阿一

仍景七 澄賢一

玄哉六 音阿一

心前六

何人 第二

1 月やかる芦へのくまも夏の海 你阿上人

2 見えし螢は宵のまの影 滋成

3 夢かよふ岩のかた敷風たちて 元理

4 やとりとたのむ嶺のさむけさ 玄哉

5 打しきり雪降そめてくる、野に 景恵

6 しはしきぬたの冬かくるをを 能哲

7 幽なる田面のつゝき道とをみ 頼喜

8 渡し捨たる里の柴橋 源応

9 はなちかふ駒は河よりむかひにて 仍景

10 うら枯のこるをちの篠はら 清誉

11 木の下の山やうすき秋の霜 紹巴

12 露もひぬまに又そしくる、 珠長

13 更行や草の枕のよはの月 心前

14 かりそめなからしたふ別路 守仙

15 今はたゝそのことの葉も何ならて 道九

16 たちへたてたる中のわりなさ 澄賢

17 ともなふも雲のいつくの山鳥 成

18 ひろふつま木の帰るさのくれ 阿上

19 しつ心なきもやすらふ花の本 哉

20 おくや桜の咲はしむらん 恵

21 古寺のさし入かすむ雨晴て 哲

22 こととはんとや人門にたつ 理

23 衣の音そよめくかたはいかならし 応

24 ふたりはねぬといふかあやしき 巴

25 かたはらのちり打はらふさ筵に 長

26 うき世わすれて月にむかはん 喜

27 身を秋になして入ぬる山の奥 阿上

28 おらぬ紅葉のにしききるかけ 景

29 大井河くたす筏もまてしはし 誉

30 音はあらしのやます吹也 理

31 引かくる松の扉のむら時雨 巴

32 うきたる雲そ行ゑさためぬ 恵

33 出る日も遙けき野へに啼雲雀 哉

34 ひとつ色なる道の若草 前

35 解残る水ともなき沢水に 哲

36 おりはへたれもかへすあらを田 誉

37 袖おほみふるの山陰つとひきて 理

38 夜をまたきたつ朝市のには 阿上

39 苦葺やしはし焼まのけふるらん 前

40 竹の葉分の軒の薄雪  
 41 とりくくにねくらにさはくこゑなれや  
 42 いく一とをりおつる夕風  
 43 早川の波にさはさすわたし舟  
 44 したやすからぬ住居とをしれ  
 45 よそめにはかはるならひの人心  
 46 ちかひ置しは忘れしもせし  
 47 さりにける仏の後も頼もしな  
 48 かねのみたけの花や待らん  
 49 霞たつきの河上のあくるよに  
 50 うらをかけたる月の長閑けさ  
 51 ほすあみの綱手にうつる日はさして  
 52 かきほの霜の雫音する  
 53 たは、にや置まよふらん菊の露  
 54 秋風のまの胡蝶しつけし  
 55 松虫の啼ねに道はまかせきて  
 56 のへの外なきいにしへの跡  
 57 尋あひ涙こほる、袖のうへ  
 58 たかひの恨いふもいはれす  
 59 枕た、そむきくくに明はなれ  
 60 とたえかちなる夢のうき橋  
 61 ねぬるまの程はみしかき春のよに  
 62 をくりむかへてあら玉の年  
 63 深みとり立そふ松のかけた(かみ)<sup>\*1</sup>

巴 惠 成 九 仙 九 景 長 巴 阿上 哲 理 哉 景 誉 巴 阿上 仙 九 阿上 成 巴

64 月は冬木の梢くれ行  
 65 す、しさをとめこし山の滝落て  
 66 石はしる水も音なしの川  
 67 あゆはみなさひたるやなの跡計  
 68 露の命の残るあはれさ  
 69 たへてうき秋の末はの蓬生に  
 70 嵐の風を袖の明くれ  
 71 分まよふ遠山伏のかり枕  
 72 夢かうつ、か人のおもかけ  
 73 ほのかにも見しをおもひの始にて  
 74 かすむまにく花やうつろふ  
 75 紅はそれとはかりの梅か香に  
 76 また消やらぬ野路の淡雪  
 77 月ならて誰か汀の朝わたり  
 78 夜のあつさを残す袖やは  
 79 真木の戸を開はさやく荻の音  
 80 こぬ人ゆへに暮の露けさ  
 81 さ、かにの糸もはかなき我頼  
 82 出やられて世はうき宮つかへ  
 83 立居さへよはひの末はくるしきに  
 84 しはふきわふる声なとかめそ  
 85 例ならぬ心は色に見えつへし  
 86 いまはといさふもの、ふの道  
 87 遙にも打はへて行馬のうへ

景 哲 阿上 巴 理 哉 前 景 誉 理 阿上 巴 惠 景 成 阿上 喜 巴 哉 成 恵 景 前 巴 恵



23 はた寒くおほゆるさよの枕して 阿上  
 24 筵は秋の霜ふりにけり 理  
 25 いつかさて思をのふる折ならん 仙  
 26 またしとすれは暮渡る空 恵  
 27 啼ぬへき雲の気色そ子規 成  
 28 にほひ初たるやとのたちはな 長  
 29 軒はよりあやめの風の袖ふれて 哉  
 30 雨の雫そをとし音せぬ 巴  
 31 宮城野はよらんかけなく末遠み 阿上  
 32 くるれは道も分ぬをくるま 誉  
 33 月に成物見のにはの所せき 応  
 34 かさす紅葉の色はいつれそ 理  
 35 露なから袖にたをれる菊の花 景  
 36 霧のまかきの水の一すち 喜  
 37 岩橋は古たる跡に朽やられて 巴  
 38 さすかにかたを残すむかしか 阿上  
 39 おもひには猶もこひしき筆なれや 九  
 40 又も見まほしまゆ墨の色 哲  
 41 とを山や夕の雲は引捨て 前  
 42 くだす柚木のかゝる一さか 巴  
 43 落滝津波もかたへは瀬を浅み 成  
 44 鷺もむら／＼まじる鴨すら 哉  
 45 月影を霜にはらふもすさましな 阿上<sup>\*3</sup>  
 46 かしらにわたる秋風の音 理

47 色になる草の庵はさひしくて 恵  
 48 とふ人かへる花はしら雪 哲  
 49 あすまては誰もたのまし春の暮 誉  
 50 むなしけふりやかすみ行らん 景  
 51 しほかまやうつすその世を思出て 理  
 52 とめこし跡は八重葎せな 阿上  
 53 たつなはの残るにとまるはなれ駒 巴  
 54 おとろきてたつ村鳥のこゑ 九  
 55 枕ゆふ山のかた岡先あけて 景  
 56 松のとひらは風のすゝしさ 理  
 57 をこたらす花さらすゝく一夏に 阿上  
 58 たく香はたえぬけふり也けり 誉  
 59 待としもしられしとこそ暮すらめ 哉  
 60 ましはる中に物思ふ人 成  
 61 そねみ思ふ身はかよはくも成初て 前  
 62 さすらへきての命あやうき 巴  
 63 舟はたゝ打まかせたるあら磯に 哲  
 64 月のいるさやにしの海はら 仙  
 65 山々も朝霧ふかき空にして 巴  
 66 色こそ見えね榎のはの露 成  
 67 冬枯は吉野のおくもかけ浅み 応  
 68 あらしの音にたへぬ隠家 恵  
 69 けた物や心々に出ぬらん 阿上  
 70 おさまる君か代をし忘るな 喜

71	なをとけて後こそ忍ぶ道ならめ	景	95	ちれは又木かけに見るも花はおし	前
72	つたへもてこし今の一まき	哉	96	春行水のさそふうき草	巴
73	打とけて語を聞はなつかしみ	仙	97	消帰る氷も末のうたかたに	景
74	うき物こしにあかす夜の月	巴	98	日かけたえくおつる山本	恵
75	おもひねのわかふる郷は霧こめて	哲	99	村々に成てやはる、嶺の雲	誉
76	こえてはとをき山そうつろふ	理	100	軒さたかなる寺は大ひえ	理
77	志賀のうらや松の沈枝 <small>シツエ</small> に花のなみ	文阿			
78	つりする舟も春やうかふる	長		清誉六 滋成六	
79	吹もた、風の音なき朝霞	喜		能哲七 頼喜五	
80	ぬる、に袖の雨はしるしも	景		心前六 玄哉七	
81	身さいはいあらはあはんの行ゑにて	巴		紹巴十三 道九三	
82	忘れはせしといふはたのものし	理		仍景九 守仙四	
83	いはけなき程は学もいかならん	恵		源応四 珠長三	
84	あしき友をは住みかゆる宿	哉		元理九 文阿一	
85	日をえらひ遠くも出し道の空	阿上		你阿上人十	
86	まほに成たる風の早舟	巴		景恵六	
87	おきつすもこゆれば波の下にして	景			
88	みちくる音もくる、たか塩	前			
89	打羽吹鳥は梢の松はらに	巴		何舟 第四	
90	雲の詠も春ちかきやま	哲	1	残らすはみしかよもなし今朝の月	玄哉
91	長月も有明かたにうつろひて	哉	2	す、しきかたに聞のとの袖	紹巴
92	残りすくなき秋のかなしひ <small>*4</small>	阿	3	下そよく軒はの荻の露落て	源応
93	虫の音は外面の野へのこ、かしこ	成	4	更行秋の松むしのこゑ	道九
94	ふみ分かたき露の古道	喜	5	をしかたつ岡への道のくる、日に	元理



- |    |                 |      |    |                 |    |
|----|-----------------|------|----|-----------------|----|
| 6  | かへる雲にも山風そふく     | 珠長   | 30 | 月や海つらさしのほるらん    | 阿上 |
| 7  | 晴わたる雨や跡よりそ、くらん  | 清誉   | 31 | をくる、も空につらなる雁の声  | 巴  |
| 8  | つもりもあへぬ雪の草村     | 能哲   | 32 | 吹はらひたる秋風の雲      | 景  |
| 9  | 木隠の花は流の末々に      | 心前   | 33 | いつくよりさそひきぬらん一時雨 | 誉  |
| 10 | 春行水の音しつかかなり     | 你阿上人 | 34 | 朝戸あくれば庭の初雪      | 喜  |
| 11 | 明ぬれは田面の蛙啼たえて    | 仍景   | 35 | 打なひく竹のは山の日は出て   | 理  |
| 12 | さとあるかたや竹の一むら    | 滋成   | 36 | もゆる木のめもその、遠近    | 哉  |
| 13 | けふも猶しらぬやとりの旅はうし | 頼喜   | 37 | やとりまたさためぬ胡蝶飛みたれ | 阿上 |
| 14 | いく度秋の時雨なるらん     | 景恵   | 38 | 霞にかゝる玉ゆらの露      | 巴  |
| 15 | 折々に色そひまさる蔦紅葉    | 守仙   | 39 | 苗代の跡にも残るみしめ縄    | 景  |
| 16 | 夕風わたる松はすさまじ     | 音阿   | 40 | ふる野の道そ神さひにたる    | 長  |
| 17 | 霧間より月をよせくる磯の波   | 巴    | 41 | 里人の夕をふかみさし籠り    | 哲  |
| 18 | さすとも見えぬ舟はうかへり   | 哉    | 42 | 旅なる袖を犬ほふるこゑ     | 誉  |
| 19 | 柴人の帰りつくせる里々に    | 九    | 43 | 帰てもしほなれ衣そのまゝに   | 理  |
| 20 | 道は跡ある霜のむらく      | 心    | 44 | つなぎとめつ、ねふるあま舟   | 巴  |
| 21 | 爰かしこもとむる山もおくならて | 阿上   | 45 | うきもはた我と心をなくさめん  | 仙  |
| 22 | 心の外のかくれ家もやは     | 誉    | 46 | さのみとひなは名や立なまし   | 恵  |
| 23 | ゆかりなく成ての後もすめる世に | 長    | 47 | うつり行かたには思ひさためてよ | 哉  |
| 24 | 思やりてもたれか尋ん      | 理    | 48 | あらましのみの山かけの庵    | 前  |
| 25 | 数ならぬ身を媒もうとみきて   | 哲    | 49 | 先咲を都の花になれくゝて    | 哲  |
| 26 | ふかきも見えぬ心さしかは    | 巴    | 50 | かすみへたつる月はなをおし   | 心  |
| 27 | 文をさへ忍ふるまゝにかき絶ぬ  | 成    | 51 | 春のよのあくれはうかふ淡路島  | 巴  |
| 28 | さすらへて行人の哀さ      | 前    | 52 | 千鳥のこゑはそことしら波    | 九  |
| 29 | こく舟の末には山も波の上    | 恵    | 53 | 立こめし雪のくもりの浦つたひ  | 景  |

- |    |                  |    |     |                 |    |
|----|------------------|----|-----|-----------------|----|
| 54 | 葛のかれ葉の露は寒けし      | 哲  | 78  | から紅の衣きにけり       | 理  |
| 55 | 秋をふる松はみさほに木たかくて  | 阿上 | 79  | しら雲もにほへる春の朝日影   | 巴  |
| 56 | あれにし跡は虫のみそ啼      | 誉  | 80  | 絵とおもはすはおらんさくらよ  | 阿上 |
| 57 | 野分さへしはし計に吹すさひ    | 哉  | 81  | のとやかに住なす家ること問て  | 哲  |
| 58 | 雲もはなれて月や行らん      | 恵  | 82  | 世をはなるへき心をやみん    | 哉  |
| 59 | 遙なる舟はなみまの明石瀉     | 前  | 83  | 千とせそと契るもあたの物語   | 理  |
| 60 | ほど、きすかの名残たになし    | 巴  | 84  | やかてかはるをならひかなしも  | 長  |
| 61 | とはれしはうつ、も夢の心ちして  | 理  | 85  | 昨日こそ都を出しる中ふり    | 景  |
| 62 | かねてはうらみかこたんとこそ   | 阿上 | 86  | た、月のみをかり臥の友     | 前  |
| 63 | さはりた、云わくるにもしるかれや | 成  | 87  | 秋の野にあくかれぬれは暮そめて | 恵  |
| 64 | われは我身のま、となるやは    | 哉  | 88  | へたつる妻もしかすかになく   | 巴  |
| 65 | かりそめの隙もまれなるつかへ人  | 恵  | 89  | 谷せはみおりる雲にまかせはや  | 阿上 |
| 66 | 仏のまへにたえぬおこなひ     | 巴  | 90  | 冬田のいな葉刈のこす頃     | 成  |
| 67 | 灯はか、けのこせる影にして    | 誉  | 91  | 氷てやせきいれ水もよとむらん  | 景  |
| 68 | こすのまかひの明るしの、め    | 成  | 92  | かけひの竹そなかは朽たる    | 景  |
| 69 | 花のかの枕おとろく山風に     | 哉  | 93  | たまさかの音信さへもまれにして | 仙  |
| 70 | ちかなくこゑはたれよふこ鳥    | 理  | 94  | あひおもふをも親さけて憂    | 哲  |
| 71 | かすみても跡は晴たるさほの内   | 哲  | 95  | 出ていにし人の行糸を尋侘    | 長  |
| 72 | 雨ま待てやいつるつり舟      | 景  | 96  | 諸共にこそきえんはてなれ    | 誉  |
| 73 | 芦葺にならふ扉は人なくて     | 阿上 | 97  | 色なから嵐のさそふ花の露    | 景  |
| 74 | ひるもふす猪の小田のかたはら   | 巴  | 98  | 明ほの残す松の葉の雪      | 巴  |
| 75 | 月の入山にすかるの遠さかり    | 成  | 99  | 鳥のこゑまたね所にさへつりて  | 哉  |
| 76 | 露をきそふるす、きいく本     | 九  | 100 | 春のやとりそしつかにもすむ   | 音阿 |
| 77 | 咲のこるやまとなてしこ秋かけて  | 前  |     |                 |    |

玄哉九 你阿上人九

紹巴十三 仍景八

源応三 滋成六

道九四 頼喜二

元理八 景恵六

珠長五 守仙三

清誉八 文阿二

能哲八

心前六

初何 第五

1 しらかしの雪まや嶺の夏木立 仍景

2 雲より出る山郭公 元理

3 末遠くかりねせし野の明やらて 你阿上人

4 月をともしなふ旅のよなく 守仙

5 すさまじき波に舟行和田の原 滋成

6 時雨くしあきの浦風 心前

7 ひくらしに打もとたえぬあさ衣 玄哉

8 しけ木のかげや里つゝくらん 紹巴

9 ふむ跡の一すちのこる山道に 能哲

10 朝の霜をたれかはらひし 清誉

11 隠家は問よる人もまれにして 道九

12 夢はあらしの風のまにく 頼喜

13 たとりきて片敷磯のなみ枕 源応

14 舟もかよはぬみなとくれ行 珠長

15 おもひやれさすらふる身の秋の空 景恵

16 なみた露けき袖のあはれさ 澄賢

17 たのむにもとはれぬ月の明はて、 元理

18 よその別になしてうき中 景

19 偽もことはりかたき程なれや 仙

20 またさかぬ花の春のしら雲 阿上

21 明ほの、山は霞にあらはれて 前

22 長閑に舟のうかふ数みゆ 九

23 遙なる入江や波も隔らん 巴

24 けふりの隙の水のかたく 成

25 床をしもわかる、鳥のこゑなれや 誉

26 出る朝けのやとの旅人 阿上

27 しらぬをも道の行てにかたらひて 哲

28 心をふる市のさかつき 理

29 思とちけふは円居を菅筵 恵

30 まれにあふよの月は有明 九

31 難面も身にしむ計秋の風 九

32 かゝるものうき露の玉のを 応

33 まきるやとらむることを引むすひ 哉

34 いつまで須磨の浦なれてまし 巴

35 冬かれの小萩も分は捨侘て 景

36 をしかたゝすむ雪の山本 前

- |    |                 |    |    |                   |    |
|----|-----------------|----|----|-------------------|----|
| 37 | 入かたは浅き木こりの嶺つゝ、き | 巴  | 61 | 開をく窓に雲間の月待て       | 前  |
| 38 | 所かへてやいほりむすはん    | 阿上 | 62 | 星に手向の文のまきく        | 巴  |
| 39 | ちれはさくかけを尋て守花に   | 理  | 63 | いかはかりかしこき人のむねの内   | 景  |
| 40 | さくらに月もひかりそふくれ   | 成  | 64 | まよひを出ぬ程のくるしさ      | 阿上 |
| 41 | 春ふくは露たにしらぬ風にして  | 長  | 65 | 山ふかみこなたかなたの道みえて   | 喜  |
| 42 | 野へのこてふそねふるまゝなる  | 哲  | 66 | はなれくのすま居こそあれ      | 理  |
| 43 | いとたえずあかる雲雀の永日に  | 喜  | 67 | いもせさへゆかをかへたるきよまはり | 巴  |
| 44 | あさちか道やしけきゆきかひ   | 景  | 68 | おもふさはりのおほきかなしさ    | 仙  |
| 45 | ふりにたる跡の家居もあらためて | 前  | 69 | 帰るさにとはんといふを待侘て    | 恵  |
| 46 | 親にかはらぬめくみかしこき   | 哉  | 70 | くるゝ大井のやとりさひしも     | 前  |
| 47 | 生たつもすくなる竹の露すゝし  | 恵  | 71 | 木枯の色をうかへる河淀に      | 成  |
| 48 | たゝすかはらの御祓するくれ   | 誉  | 72 | 綱代によする波のたえく       | 景  |
| 49 | いつしかと祭の日比ちかつきて  | 巴  | 73 | 晴やらぬ霧は今朝まで夜をこめて   | 長  |
| 50 | 人の心のなをいさみけり     | 仙  | 74 | 谷のと山の月はなか空        | 巴  |
| 51 | とくにこそ哀もまされ法の庭   | 哲  | 75 | 啼てかりおのへのいつこ過ぬらん   | 阿上 |
| 52 | 道はをしへの外に有とや     | 阿上 | 76 | またくれぬまのかねとをきこゑ    | 理  |
| 53 | とめきつる鳥の落草それならて  | 成  | 77 | 花はたゝ春を残して散もおし     | 哲  |
| 54 | かけよりまたき暮そむる山    | 巴  | 78 | やよひといふもくはゝりてなき    | 哉  |
| 55 | 柴の庵しはしとたにもとゝめかね | 哉  | 79 | あかなくもしゐて霞を酌袖に     | 誉  |
| 56 | いそかはしさの世をおもひしる  | 恵  | 80 | 水にたはむれ詩をうそふける     | 阿上 |
| 57 | あふくにや君か御幸やちかからし | 理  | 81 | あつき日は爰にかしこにやすらひて  | 巴  |
| 58 | 玉をほり江にしける白波     | 成  | 82 | やふしかくれに鴉啼こゑ       | 前  |
| 59 | 風なから蓮のうき葉の露しけみ  | 巴  | 83 | ふくろふのあくれはいつちやとるらん | 哲  |
| 60 | 日晩なげは秋もすゝしき     | 誉  | 84 | ねられぬよはの雨のさひしさ     | 成  |

85 打かたるその品々に慰て 恵

86 また見ぬ人も思ふとをしれ 巴

87 恋草の種や心にまかすらん 理

88 かく玉章におほきことの葉 喜

89 まめたつも忍ふるすちに跡なくて 景

90 哀は月にのこるいにしへ 誉

91 めくりくる秋もかなしき身のよはひ 哉

92 侘つゝむしのなくはいつまで 九

93 冬深き垣ほは朝な夕霜に 成

94 またかれやらぬそのゝ竹の葉 前

95 またるゝや根こしてうふる春の花 巴

96 野山をこゝにうくひすのこゑ 哉

97 かすみをも分もてきての草枕 景

98 小雨にさへや袖はぬれそふ 長

99 くるゝともよしやいとほしまりには 仙

100 たちましはりもたまさかの人 阿上

仍景八 清誉六

元理八 道九四

你阿上人九 頼喜四

守仙五 源応二

滋成八 珠長四

心前八 景恵六

玄哉八 澄賢一

紹巴十三 能哲六

唐何 第六

1 五月雨は月まつ天の戸さし哉 能哲

2 しける木の間にくるゝ河音 頼喜

3 柴舟や山もとちかく帰ららん 清誉

4 水のけふりの晴わたる末 景恵

5 入日さす垣ほの野への冬かれに 滋成

6 葉分にしろき霜のむら竹 仍景

7 吹落てあらし寒けき小田の原 源応

8 かよひたえたる玉ほこの道 元理

9 いつちにか妻とひなれし鹿のこゑ 你阿上人

10 うつろひ残る萩の一もと 紹巴

11 かり捨る跡は露けき草村に 心前

12 帰る野沢の月に成くれ 玄哉

13 そことなく小舟は風にたゝよひて 道九

14 岩まゝになみかゝるをと 珠長

15 しはしもや雨の名残の雲ならん 守仙

16 あつさわするゝ道のへの袖 文阿

17 遙々と嶺越きつる旅衣 喜

18 かりねすさめし夜はの夢人 哲

19 風たえぬ松かね枕敷侘て 恵

- |    |                                   |     |    |  |     |
|----|-----------------------------------|-----|----|--|-----|
| 20 | あすまで花よ散なつくしそ<br>限とてなにかは春の暮ならん     | 景 誉 | 44 | いかにいふせきこやの蚊はしら<br>憂思はらふはよるの扇にて         | 理 誉 |
| 21 | かすみの内にならす鳥の音                      | 成   | 45 | くもれる月そ人たのめなる<br>いなつまは暮ぬる方に消かへり         | 阿上  |
| 22 | かけちかき山を砌に住なして<br>ほとなくうつる一夏の空      | 理   | 46 | 末葉の露はおなし下草<br>おらてたにいとふは風の花盛            | 恵   |
| 23 | 色々の衣も冬にたち重                        | 巴   | 47 | かけ行水に春をせかはや                            | 巴   |
| 24 | 苔に落葉かうへのあさ風                       | 阿上  | 48 | 詠やる橋は浜名の朝霞                             | 景   |
| 25 | 寒しよの霜置渡す板橋に                       | 哉   | 49 | 日もなか雨のつれ／＼の空<br>とひ捨て帰るを友やおしむらん         | 前   |
| 26 | 秋の月すむ川そひの道                        | 前   | 50 | つゐにやわれも山陰の庵<br>古跡も隣より先田と成て             | 阿上  |
| 27 | 天津雁汀の友にさそはれて<br>霧のたえまに遠の山の端       | 長   | 51 | 思よらすも鳴のたつこゑ<br>起出る暁露の道の末 <sup>*6</sup> | 九   |
| 28 | 武蔵野も分れば末に成けらし<br>行々ていつ旅はかへるさ      | 成   | 52 | あかぬ別は月もとゝめよ<br>たのめとも一夜の後は云ひかたみ         | 巴   |
| 29 | 住残り心をつくす古郷に                       | 理   | 53 | をよはぬになと身をつくしけん<br>我なから物をはおもひ知かほに       | 成   |
| 30 | かひま見しその人の倂                        | 景   | 54 | 鏡のかけのやつれかなしも<br>あつしさもけふをはしめとをこたりて      | 哲   |
| 31 | かけをかはいとさなきこそ契なれ<br>しろかみまでの中の年々    | 誉   | 55 | いれは心のきよき山寺<br>杉たてる門よりおくの鐘のこゑ           | 景   |
| 32 | いにしへを昨日今日そとおもひきて<br>なきすかたをもたくかにや知 | 九   | 56 | 雪の夕そいと、しつげき<br>よるひるのはいかきならず埋火に         | 哉   |
| 33 | 夕霞たち枝はいつこ梅の花                      | 長   | 57 |  | 長   |
| 34 | 声につたへる竹のうくひす                      | 恵   | 58 |  | 成   |
| 35 | 吹かふるうらめつらしき春の風                    | 阿上  | 59 |  | 景   |
| 36 | 日より待えて舟出する袖                       | 喜   | 60 |  | 巴   |
| 37 | もくつ火のうすき煙やしめるらん                   | 巴   | 61 |  | 喜   |
| 38 |                                   |     | 62 |  | 恵   |
| 39 |                                   |     | 63 |  | 理   |
| 40 |                                   |     | 64 |  |     |
| 41 |                                   |     | 65 |  |     |
| 42 |                                   |     | 66 |  |     |
| 43 |                                   |     | 67 |  |     |

68 あはんあはしのうらもいく度  
 69 ちゝになる心いられをくせにして  
 70 おつる袂のなみたはかなや  
 71 衣々のあとにかた敷月もうし  
 72 露夢はかり又も見えなん  
 73 朝顔はあやなく色も消はて、  
 74 明石のなみのよせかへる音  
 75 はなれ住岡への里は物さひし  
 76 田中の道は行人もいさ  
 77 緑さへ花にけたれし柳陰  
 78 散まよひたる風の梅園  
 79 沫雪もしはしは春の空にして  
 80 しくるれはこそ神無月なれ  
 81 かはしをくそのかねことも偽に  
 82 世のなみならぬ身そ恨なる  
 83 まつしくも成にむかしやおもふらん  
 84 ともかくにもなからへそ憂  
 85 先たてし心のやみのはれかたみ  
 86 松の火はきえたとる山道  
 87 月もまた木の下かけはほのかにて  
 88 すゝしさをこそ秋の物なれ  
 89 蝸や啼て夕をいそくらん  
 90 霧のふかきや雨にまかへる  
 91 さしのほる舟も河門は過やらて

景 阿上 景  
 前 巴 前  
 哲 譽 恵 巴 理 景 仙 九 阿上 哲 巴 成 譽 前 長 心 哉 巴 前  
 景 巴 前 哲 譽 恵 巴 理 景 仙 九 阿上 哲 巴 成 譽 前 長 心 哉 巴 前

92 よふこゑちかし里はあるらん  
 93 朝明の野中の枕残るよに  
 94 さめてもしはし夢こゝちなる  
 95 思はずもとふ嬉しさは浅からて  
 96 憂二みちもさもあらはあれ  
 97 めくりあはん此世後の世忘れなよ  
 98 花にも契るよもきふの春  
 99 しつかなる露やすみれにかすむらん  
 100 つはさをたる、蝶のいくむら

哉 理 阿上 恵 成 哉 巴 哲 前

能哲七 心前七  
 頼喜四 玄哉七  
 清誉八 道九四  
 景恵七 珠長五  
 滋成七 守仙二  
 仍景九 文阿一  
 源応三  
 元理七  
 你阿上人九  
 紹巴十三  
 三字中略 第七  
 1 こすゑまで植渡したる山田哉

心前

- |    |                 |      |    |                 |    |
|----|-----------------|------|----|-----------------|----|
| 25 | あさりしもともなひかへる雁啼て | 阿上   | 49 | 月はた、かたふきつ、も長閑にて | 応  |
| 24 | ふむ跡いつの雪間なるらん    | 景    | 48 | たつ田の山のあけほの、春    | 景  |
| 23 | 岩かねは残る砌の春さひし    | 哉    | 47 | かつらきやたかまにつ、く花盛  | 喜  |
| 22 | 朽て桜や庭に木たかき      | 誉    | 46 | 雲より空はひとつなる色     | 恵  |
| 21 | 流くる水淡もひとつ花の色    | 成    | 45 | よしあしやまことの道に分さらん | 巴  |
| 20 | 夕の月に舟そやすらふ      | 恵    | 44 | 罪にあたるもゆるすはてく    | 哲  |
| 19 | 人かよふ山へを鹿の出やらて   | 哲    | 43 | きて見るはうつす都の跡にして  | 理  |
| 18 | 虫の啼ねは小野のかたはら    | 前    | 42 | 杉板葺の寒きひまく       | 阿上 |
| 17 | 露霜になひきてかる、女郎花   | 長    | 41 | 風はやみ時雨にまじる玉あられ  | 仙  |
| 16 | 残る枕のうつりかもおし     | 音阿   | 40 | 枯葉なからもしけき篠原     | 成  |
| 15 | と絶なき涙の床の明くれに    | 源心   | 39 | 古畑のあたりの水はみさひるて  | 長  |
| 14 | 憂にたへたる袖のあはれさ    | 元理   | 38 | 岨のかけちは駒もす、ます    | 誉  |
| 13 | 旅衣きても程ふる道ならし    | 道九   | 37 | 日暮てを帰るあしもと見わかはや | 恵  |
| 12 | 名もなつかしくしのふ九重    | 守仙   | 36 | いとむ気色もしるき舞人     | 巴  |
| 11 | 芦たつのかけりて遠き声々に   | 頼喜   | 35 | あふきをはとられて憂と打うたひ | 景  |
| 10 | おりある雲もはる、江の水    | 你阿上人 | 34 | 酔のまきれはた、しはしこそ   | 成  |
| 9  | 山のはは色にうつろふ朝ほらけ  | 紹巴   | 33 | うた、ねの覚ておほゆる袖の露  | 哲  |
| 8  | 時雨にけらし秋かせのくれ    | 玄哉   | 32 | 宵更けらし衣うつこゑ      | 阿上 |
| 7  | 月影もこほる、野への露みえて  | 仍景   | 31 | す、しさも月待程の秋の風    | 巴  |
| 6  | たか枕にかむすふ若草      | 滋成   | 30 | 波にさほさす河つらの舟     | 応  |
| 5  | 起出しかたは遙にうちかすみ   | 清誉   | 29 | 音はまた零に残す雨晴て     | 前  |
| 4  | 春のみなどを跡になす舟     | 能哲   | 28 | 竹の葉かくれけふる夕かけ    | 喜  |
| 3  | 子規行々わかぬ声消て      | 景恵   | 27 | 人すまぬところくの一いほ    | 理  |
| 2  | てる日も夏の雨のこる空     | 珠長   | 26 | 荒わたりたる田面遙けし     | 巴  |



50 旅としもなき枕ならずや 哉  
 51 古郷はけふこそ立も別つれ 阿上  
 52 萩に忍し秋のはつ風 巴  
 53 野は露も置あへぬまの緑にて 理  
 54 いかてかかゝる松虫のこゑ 誉  
 55 人めこそ此山住にたえにたれ 哉  
 56 ほいかなへつゝ、入法の門 前  
 57 国もたゝゆつるに末は猶たえし 巴  
 58 もてはやさるゝ弓筆の道 阿上  
 59 武士の心も歌にとけそめて 景  
 60 やはらきかはす中の手枕 理  
 61 ふたりきてぬるも薄しや筑紫綿 譽  
 62 霜もをきそふさむしろの月 哲  
 63 暮てより声かしかまし軒の松 巴  
 64 山陰はたゝましら侘しら 景  
 65 ほのかにもうつる日吉の神さひて 恵  
 66 舟よせかへる志賀のうらなみ 前  
 67 とちはつる氷もなかは解けらし 成  
 68 をし明かたの天の戸の春 阿上  
 69 雲間もる星の光も霞きて 応  
 70 月より後の夜はしつか也 哉  
 71 吹すさふ野分の跡はをく露に 理  
 72 ひらき出たる朝顔の色 巴  
 73 垣柴の隙は外面もひとつにて 景

74 いやしき身にも心有けり 仙  
 75 思はずの情こそたゝ恋路なれ 哲  
 76 とはれそめての末いかゝせん 恵  
 77 忘るなよ花に紅葉に雪の友 巴  
 78 くらせはくらすとしくくの空 誉  
 79 暑をもいとはん庵の内ならて 成  
 80 こゑするよりも蚊遣焼そふ 前  
 81 蝉のはのうすく成こし夕日かけ 哲  
 82 晴ても小雨しはし見えたる 恵  
 83 やすらひにねふれるまゝの中やとり 阿上  
 84 うかれめにさへ名残なしやは 巴  
 85 あやにくに忘ぬもうき心にて 長  
 86 折ふしことのなけの言葉 景  
 87 なれくゝて後の親とも頼む身に 巴  
 88 おもひへたつるおとゝひそかし 哉  
 89 梅か香におとりやするの菊の花 前  
 90 紅葉に見るもことさらの露 応  
 91 秋風に雲の林の月すみて 喜  
 92 伊駒のたけもちかき難波江 景  
 93 行舟の浪もなきたる此朝 阿上  
 94 道のかとてもいはふにやよる 理  
 95 をしいれて衣にとふるぬさ袋 哉  
 96 袖もそれとはしるきはふりこ 譽  
 97 春風の花を簾に吹かけて 哲

98 誰かれ時のかすむ小車

巴

9 さをしかのかよふ外面の山ちかみ

滋成

99 二月の比は往来もさま／＼に

仙

10 立へたてたる嶺の朝霧

頼喜

100 仏の別おもはぬはなし

成

11 いくとほり月の行多の時雨らん

心前

心前七 你阿上人九

珠長四 頼喜四

12 木のまにおつる水のかた／＼

仍景

景恵七 守仙四

13 しはしとてす、めはくる、松の陰

珠長

能哲八 道九一

14 いつしか日をはをくりきにけん

道九

清誉七 元理七

15 限ありてかへんもかなし墨の袖

源応

滋成七 源応五

16 思心にまかすへき身か

澄賢

仍景九 音阿一

17 難面をあまりしたふもくるしくて

守仙

玄哉七 音阿一

18 命今はと告やりてみん

理

紹巴十三

19 あすまての恨は世にも残さめや

哉

何木 第八

1 月や置て床夏に見ん花の露

元理

20 おしむとしても行春の空

巴

2 くもるもしるき白雨の庭

玄哉

21 音たかき嵐のさそふ花の雲

恵

3 浅からぬ陰の山水流きて

音阿

22 跡はのとけきむら雨の露

哲

4 にほのうきすにうきてた、よふ

景恵

23 待し間の心ともなし時鳥

阿上

5 吹かたも分すはけしき浦風に

紹巴

24 打ぬるよはのあかつきの夢

成

6 消てはむすふ椎のはつ霜

你阿上人

25 水のこゑよとむ岩ねを枕にて

誉

7 秋寒く夕日の末や成ぬらん

能哲

26 そことも分ぬ鐘さむき山

前

8 もよほす声に衣うつ里

清誉

27 行方の梢を雪やうつむらん

理

28 風はたえたる雲の一むら

長

29 飛跡のかりはみる／＼はつかにて

巴

30 門田の面のほのくる、色

阿上

31 露はた、乱もあへぬ秋の霜

景

32 月待袖は更てすさまじ

哲

33 端近く出居て人を頼よに  
 34 我前わたり忍ふるはうし  
 35 度々のよその契はねたましや  
 36 あたなるにこそ名は立にけれ  
 37 たえて今跡もなからの橋柱  
 38 身はいつまでか古残るへき  
 39 袖はた、同じ緑の色にして  
 40 しもなかなる望もそ憂  
 41 うきまよふ雲も半の嶺の寺  
 42 杉の木たちに雨は過けり  
 43 河音もちかきふる野に分出て  
 44 田つらの末の水のひきく  
 45 はなちかふ駒の綱手は跡先に  
 46 いく一つれかかへる里の子  
 47 なくさめてうたふうたひもをろか也  
 48 たかん庭火のかけをまつほと  
 49 かけそふるゆふ花しろき夜の月  
 50 袖も霞にくれし春日野  
 51 鶯はき、捨ぬへき声ならて  
 52 かへりみしつ、こゆる関の戸  
 53 旅はけふをくる人にも立別  
 54 なからへはともいひそかはせる  
 55 一度はた、あちきなき契りにて  
 56 いつよりわたる天の河なみ

哉 巴 恵 応 九 哉 前 巴 哲 恵 阿上 理 景 譽 巴 応 恵 巴 哉

57 ほのかなる霧に片野の夕月夜  
 58 梢の中にはし紅葉せり  
 59 なひきぬる竹のむら／＼鴨なきて  
 60 はらへは袖に霜ふかき道  
 61 明やらていそくは誰そ高瀬舟  
 62 けふりにこもる宇治の川水  
 63 伏見江や打見わたしも分さらん  
 64 早苗の色もしけき芦垣  
 65 飛螢朝の露に影きえて  
 66 かすかなるより日はあつけ也  
 67 行はやとおもふやとりも出かたみ  
 68 しつはたふかき情こそあれ  
 69 かた糸のあふよの後はたえもせし  
 70 つくしもてこし心いくはく  
 71 さくをまちちるをかなしむ春の花  
 72 さへつる鳥はその、かたはら  
 73 霞よりもる、日かけの山隠  
 74 石間の氷なかれいつめり  
 75 色うつる水の萍さそはれて  
 76 音にはたてぬ川風そふく  
 77 をのつから秋なる月の下す、み  
 78 袂の露ははらふ跡より  
 79 うら枯の野中の道は霜ふりて  
 80 松の一木そ陰はるかなる

巴 景 恵 喜 巴 阿上 前 巴 景 哲 仙 理 譽 恵 前 成 巴 哉 阿上 応 哉 巴 景 巴 哲 哉

81	けふるこそしらぬ栖の夕間暮	理	景恵七	道九四	
82	舟行かたは波の島々	前	紹巴十三	源応五	
83	磯枕むすひもあへぬ旅ならん	九	你阿上人八	守仙三	
84	哀はかなき夢野いく度	景	能哲七	澄賢一	
85	又もこそむまれあふへき此世なれ	巴	清誉七		
86	ふかき契の向後わするな	誉	滋成六		
87	しめ置し有増ことの柴の庵	阿上	頼喜二		
88	花にとめ入おく山の道	巴			
89	朝霞分まとはせるよふこ鳥	哉			
90	暮て思へは日なかきもなし	成	音何 第九		
91	半天に出て夜を待月の影	恵	1 わくら葉の木陰に鹿の声もかな	紹巴	
92	さひしき秋の雨も晴けり	哲	2 こぬ秋の露やおく山のくれ	你阿上人	
93	とりく今やをしねをはこふらん	仙	3 落滝津袖にすしき波かけて	仍景	
94	宿は事たるたからつむへく	理	4 かた敷月も更るよの空	滋成	
95	よむ文字に残さず道をつたへきて	長	5 かりかねやかりねの夢をさそふらん	心前	
96	遠きあかたもたよりこそあれ	景	6 風もや、はた身にしめる比	玄哉	
97	ひろふにやともしからさるかいつ物	巴	7 野へちかき庭の萩かえかつ散て	景恵	
98	さかなとりそへめくるかはらけ	誉	8 いら日の跡そしはししくる、	守仙	
99	たまさかの人にはあふも始にて	九	9 初雪や残して雲の帰るらん	元理	
100	言葉かはせとうちもむかはす	哉	10 末もあらはに嶺のかけはし	能哲	
			11 川上の山をうかふる水すみて	頼喜	
			12 蛍のかけそ月に消行	源応	
			13 ならず手の閨の扇も明るよに	清誉	
			14 簾にちかしにほふ袖くち	珠長	
	元理八				心前六
	玄哉十				仍景八
	音阿一				珠長四

15 かけそむる思のゆくゑいかならん 道九  
 16 あたし心はたのまれもせず 文阿  
 17 うつろはん花とやおほふ夕霞 阿上  
 18 ふり出るよりあらしき春雨 巴  
 19 しつかなる蝶の翅もかた〜くに 成  
 20 野は緑にやつゝく草垣 景  
 21 うへわたす末はそしろの小田のいほ 哉  
 22 かたへ水行谷あひの道 前  
 23 風のまにおりある雲やまよふらん 仙  
 24 たくも真柴のけふり寒けし 喜  
 25 かりくれし雪にぬれたるやとりして 哲  
 26 しはしと駒をひかへやすむる 恵  
 27 打むかふうへに岩ほのかけたかみ 巴  
 28 春はいつより生はしめけん 哉  
 29 はなれたる磯へは人の住もうし 景  
 30 事問よるは海士のよひこゑ 理  
 31 捨舟と見しやさほさすかけならん 阿上  
 32 なひくも薄き霧の遠方 成  
 33 明渡る竹のは山は月落て 巴  
 34 啼つゝ鳥はねたる秋の夜 誉  
 35 かねやたゝ別を人にいそくらん 長  
 36 こなたの外も又ちきりをく 景  
 37 あらざらん世にたにめぐりあひてまし 成  
 38 出ん仏を待かひさしき 理

39 とちこもり入やたか野の山ならし 恵  
 40 氷の底の玉川のなみ 哲  
 41 卯花はたゝ白妙の汀にて 阿上  
 42 垣も流の五月雨の中 巴  
 43 問ぬへき人もうとくや成ぬらん 成  
 44 せめて使よわれにかはるな 景  
 45 うたかひの心つくしはいか計 仙  
 46 きゝもさためぬ道の辻うら 恵  
 47 遙なる旅のかへさを待侘て 前  
 48 なれぬるさとも出ていぬめり 巴  
 49 みよし野や花におはすての秋の月 景  
 50 なにと詠ん夕明ほの 哉  
 51 さま〜の心はうかふことの葉に 理  
 52 限ありけり筆のうつし絵 前  
 53 いかなれは千尋のたつは見えつらん 恵  
 54 かくしてとけるこの法には 阿上  
 55 すむ里は神かき近きあたりにて 巴  
 56 とめるめくみをいのらぬもなし 理  
 57 藤氏の末葉なからもかけしけみ 成  
 58 霞かゝれる大原のやま 恵  
 59 炭かまの煙は春も消やらて 長  
 60 さえ残りつゝ雪ふかき比 巴  
 61 はつかなる沢の根せりはもとめ侘 景  
 62 月うちはふきたてる水鳥 阿上

- |    |                              |    |     |                |    |
|----|------------------------------|----|-----|----------------|----|
| 63 | ぬしもなき舟は方よる夕波に                | 哲  | 87  | 住の江や海へも春の朝朗    | 応  |
| 64 | むかひに遠き里のかよひち                 | 誉  | 88  | とを里小野の霞はれゆく    | 長  |
| 65 | 岡への松の葉こしの嶺の庵                 | 巴  | 89  | 雨はまた軒はの竹に打そよぎ  | 理  |
| 66 | とひこぬもたゝ恨とはせし                 | 九  | 90  | 吹出けるも風のたえく     | 成  |
| 67 | 妹かりはとらの臥野を中にして               | 理  | 91  | 誰笛の遙に成てきこゆらん   | 阿上 |
| 68 | 風すさましくわたる呉竹                  | 喜  | 92  | 馬草をおひて先帰る跡     | 哉  |
| 69 | 朝顔は雪にあつめる色もおし                | 前  | 93  | 日くるれはつなき置たる川舟に | 誉  |
| 70 | むすひなれしはいつまでの露                | 成  | 94  | 夏をわするゝ水のさしかけ   | 哲  |
| 71 | 月は、や有明方の草枕                   | 誉  | 95  | 草茂る中に山吹の花咲て    | 前  |
| 72 | なげ郭公さても難面                    | 阿上 | 96  | 住里あれや道の一筋      | 阿上 |
| 73 | 春にやはをくれて花の残らまし               | 哉  | 97  | 仙人もまされ出つゝ、たつ市に | 理  |
| 74 | 梅（か） <sup>*7</sup> 、よりもあら玉の年 | 景  | 98  | 酌にいかてかつきぬ盃     | 景  |
| 75 | 山風の音にしははかすみかね                | 哲  | 99  | 歌はたゝ心のなしとしるかれや | 巴  |
| 76 | 舟はかたほにたゝよひて行                 | 巴  | 100 | やはらくにもそ国はおさまる  | 恵  |
| 77 | 塩ときや迫門こす波のはやからし              | 成  |     |                |    |
| 78 | 千鳥の声は半天にのみ                   | 前  |     | 紹巴十三 頼喜三       |    |
| 79 | 冬の夜の寒ささこそとね覚して               | 仙  |     | 你阿上人九 源応三      |    |
| 80 | かきおこしたる床のうつみ火                | 恵  |     | 仍景十 清誉六        |    |
| 81 | しきみ折おこなひ結ふ暁に                 | 巴  |     | 滋成八 珠長四        |    |
| 82 | 苔の衣は露のまにく                    | 哲  |     | 心前七 道九二        |    |
| 83 | 岩宿の内は雫も霧降て                   | 景  |     | 玄哉七 文阿一        |    |
| 84 | 雲より月はもりそむる暮                  | 哉  |     | 景恵八            |    |
| 85 | ちらぬまは山をもかくす花盛                | 巴  |     | 守仙四            |    |
| 86 | わつかにかゝる松の藤なみ                 | 誉  |     | 元理八            |    |

能哲七

何草 第十

- 1 空に明てこもらん峯や夏の月 景恵
- 2 木くらきかたへ水鶏なく比 清譽
- 3 道は猶流の末に音添て 道九
- 4 とくる氷や春しらすらん 心前
- 5 野へは今所々の下萌に 能哲
- 6 霞の朝け駒いはふ也 紹巴
- 7 打はらふ跡より袖の雪散て 你阿上人
- 8 帰るさ寒みをくる松風 滋成
- 9 入相のひゝきは遠き梯に 仍景
- 10 夕日をなかくす山川の末 元理
- 11 水上や妻木こりつむ舟見えて 玄哉
- 12 市は野中に道つゝくらし 源心
- 13 たれとなく笠のはならふ数おほみ 守仙
- 14 うふる田長の遠近の袖 頼喜
- 15 ゆたかさの家居もしるく住なして 珠長
- 16 里は朝のけふりこそたて 音阿
- 17 呉竹よるの霜をや残すらし 譽
- 18 吹しきりたるかけの山風 恵
- 19 かすむ日も暮はてぬれば月見えて 前
- 20 しつかに帰る道のへの春 九

- 21 磯つたひよると計の花の波 巴
- 22 羽をよはけなる鳥のあはれさ 哲
- 23 朝霧の雫も露もしめる野に 成
- 24 いつくに秋は先しくるらん 阿上
- 25 すさましく音は嵐の一とをり 応
- 26 ね覚の後そいとゝ夜長き 哉
- 27 昔しる月こそ老の友ならめ 理
- 28 くちはてけりなよもきふの松 巴
- 29 かき置も霜の落葉は焼侘て 哉
- 30 山下道はふむ跡もなし 長
- 31 閉にけりむすひし夏も杉の門 巴
- 32 残る氷室は岩のかたはら 景
- 33 うつる日の影も幽に暮初て 喜
- 34 竹のおくなる家鳩のこゑ 阿上
- 35 ふる宮はおもひやるたに物さひし 巴
- 36 それかあらぬかともし火のもと 前
- 37 打むかひ手をあらそへる乱碁に 譽
- 38 もろこし人のいかにかしこき 巴
- 39 まほろしのすかたにたにもなくさめて 景
- 40 まことならねとそふ心ちする 理
- 41 衣のかのあやしき計とまる身に 哉
- 42 とかめはおもひなにとこたへん 哲
- 43 あげやらぬ真木の戸口を行かへり 前
- 44 すをくふ鳥や人をいとへる 恵

- |    |                   |    |    |                  |    |
|----|-------------------|----|----|------------------|----|
| 45 | 霞猶ふかむる山の谷かくれ      | 成  | 69 | たつかなく成もてくれはあちきなし | 誉  |
| 46 | 雪けしらるゝしら波の音       | 九  | 70 | 親あるほとの中はむつまじ     | 景  |
| 47 | 竜田河川花もやつれてなかるらん   | 阿上 | 71 | 糸竹も引とゝのふるこゝろみに   | 哉  |
| 48 | いとにみたれし青柳のかけ      | 景  | 72 | 軒のひまゝかゝるさゝかに     | 成  |
| 49 | 秋風の月は簾のつりはりに      | 巴  | 73 | 名はそれと分ぬ夏虫飛散て     | 巴  |
| 50 | あたゝめ酒や詩の友となる      | 哉  | 74 | 常にけたしのとし火のかけ     | 哉  |
| 51 | から衣うちなかむるや歌心      | 理  | 75 | はかなさの後の闇路を侘る身に   | 恵  |
| 52 | とはんけしきににたる夕くれ     | 恵  | 76 | こえん日数ははやつつか山     | 誉  |
| 53 | かならずとちきらぬをたにたのまれて | 哲  | 77 | へたてなくてらせる月の都出て   | 阿上 |
| 54 | あひやとりをも別行人        | 成  | 78 | しはしかほと秋風の雲       | 前  |
| 55 | 誰か又此世に住ははてなまし     | 応  | 79 | 涼しやとたちやすらへはひやゝかに | 成  |
| 56 | みたるゝ時はねかふおく山      | 巴  | 80 | あたりは袖も落滝つなみ      | 巴  |
| 57 | いつくまで花に風なき陰ならん    | 景  | 81 | 明暮の床の哀を見せはやな     | 景  |
| 58 | おほふ霞をき帳ともかな       | 哉  | 82 | ふるされはてし人はうらめし    | 応  |
| 59 | わきも子を打つれ春の野遊に     | 巴  | 83 | 行末はなにとるならの宮古かた   | 恵  |
| 60 | 人に忍はんこともわすれき      | 阿上 | 84 | さける桜も風はゆるさし      | 哲  |
| 61 | 月待といふへき袖は涙にて      | 恵  | 85 | 一枝はしるても手折花なれや    | 哉  |
| 62 | おもふあたりになかすあきのよ    | 景  | 86 | 春の余波も今日のみの空      | 阿上 |
| 63 | ともなふも虫の音しけき小萩原    | 前  | 87 | 深草や立のほりたる夕霞      | 巴  |
| 64 | たちともかへすをしか啼也      | 哲  | 88 | かりはの鳥のこゑはいつらは    | 前  |
| 65 | 霧は猶明はつるまで晴やらて     | 喜  | 89 | 広き野や月に成まで分ぬらん    | 誉  |
| 66 | たゝ空にしもふしのねの雪      | 巴  | 90 | 露を嵐のためぬたか萱       | 哲  |
| 67 | うらかけてゆけとも同じ舟の上    | 阿上 | 91 | まはらなるいほりの内は秋寒み   | 景  |
| 68 | 憂さすらへのかへらんはいつ     | 理  | 92 | ひかたかりけりあらふ衣手     | 成  |



93 川つらは井せきのうへも波かけて  
前  
94 うち羽ふきつゝならふ白鷺  
恵  
95 見るまゝにかたへよりほのくれわたり  
仙  
96 村のけふりそ風によこきる  
景  
97 遙かなるたかねは雲の晴ぬ日に  
長  
98 まなく時雨の山めぐりする  
哉  
99 河音や限もあらずのこるらん  
理  
100 作りつゝくる里の千町田  
巴

景恵八 元理六  
清譽六 玄哉十  
道九三 源応四  
心前八 守仙二  
能哲七 頼喜三  
紹巴十四 珠長三  
你阿上人八 音阿一  
滋成七  
仍景十

何水 追加

1 しつかなる谷の戸たゝく水鶏哉 守仙  
2 明かたふかき月の夏山 澄賢  
3 立ならふ松によこ雲引捨て 文阿

松本麻子・肥前島原松平文庫蔵『石山世尊院千句』の翻刻と解説

4 あらしの風のいつち過らん 景仍  
5 時雨か見えしは野への初雪に 景祐  
6 かりのやとりも出かてになる 小曾  
7 旅はたゝ遠近人になれくゝて 重祐  
8 数はあまたの酔のさかつき 景恵

永祿七甲子年五月十二日

於石山世尊院

注

- (1) 虫損。諸本にて補う。  
(2) 底本「長ヒ」として「哲」とする。  
(3) 底本「理ヒ」として「阿上」とする。  
(4) 底本「さヒ」とする。  
(5) 底本「もたゝヒ」とする。  
(6) 底本「にヒ」とする。  
(7) 虫損。諸本にて補う。

〈付記〉

本稿は平成三〇年度科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金 課題番号：18K00286）の研究成果の一部をまとめたものである。貴重な資料の閲覧と翻刻許可を出して下さった肥前島原松平文庫に御礼を申し上げる。

（まつもと あさこ／日本文学）